

題字は川又正筆
茨城国語教育学会
会報さらしゐ
第三十八号
発　行　所
〒310-0056
水戸市文京２－１－１
茨城大学教育学部
国語教育教室
茨城国語教育学会
電話　029-228-8111(代)
228-8214(直)
印　刷　所
〒310-0043
水戸市松が丘２－３－23
佐藤印刷株式会社

「文字文化」とは
～文字の場所と言語行為～

齋木久美

現行中学校学習指導要領国語第三学年の書写の事項に「文字文化の豊かさに触れ」とあります。平成二十告示の中学校学習指導要領には、「文字文化」の語はありませんが、学習指導要領解説国語編の第三学年書写の事項に、「文字を手書きすることの意義に気付かせ、併せて、文字文化に関する認識を改めて形成させる」とあり、文字文化に関する学習が求められて二十年近くになるといえるのではないでしょうか。

二月の茨城国語教育学会では、文字文化をテーマにした講演や研究発表が行われ、大変意義があると感じました。

三月に「東アジアにおける文字文化の教育」と題する教育フォーラムに参加しました。登壇した古賀弘幸氏の講演や論稿が大変参考になりましたので、その一端を紹介します。

文字は何らかの媒体に記録され、交換され、さらに現前しない他者とのコミュニケーションを可能にします。ある時代・ある共同体に現れる無数の文字の総体とそれを可能にするさまざまの条件とその秩序を「文字環境」、その条件の下で人間精神あるいは機械によって無限回繰り返される、文字を「書く」または「読む」「交換する」ことは、「文字生活（実践）」を形成し、その交換の場を「文字空間」と名づけることが可能と古賀氏は述べています。そして「文字生活（実践）」は、「技術と表現の欲望と社会」が相互に嵌入、循環しながら営まれ、ここで生み出される文字についてのすべての事象・観念が「文字文化」であるとしています。

文字のメディアが書物という統一した形式をもち、共同体の知識としてストックされ、また教育の重要な媒体となります。知識のストックや教育の媒体となった背景には、文字を複製する拓本や印刷などの技術の存在も大きく、こういった技術を成立させてきた経済や産業などとの関係も無視することはできません。

文字が姿を現す「文字の場所＝メディア」は、古代から中近東では粘土板、のちにパピルス、東アジアでは甲骨、石、竹、木、紙……と変化してきており、現在では電圧をかけられた液晶板が多くを占めるようになったと述べています。

近代以降、筆墨によって文字を書くことが特別なものになってしまった現在、「文字文化」において「手で書くこと」と「機械によって複製された文字を運用すること」を対立的に考えるべきではなく、ともに「言語行為」であると指摘しています。

こういった指摘から、現代社会における文字の役割、文字を表現する行為を、社会学的な視点で捉える必要性を実感します。具体的には、文字の読み書きから、実社会での言語行為を考える学習を、文学や国語学、教育学との関わりで文字文化の学習に位置付ける実践的研究を推進していく、となるように思います。

さて、「電圧をかけられた液晶板」も「文字の場所」の指摘で思い出したのが、京都の漢字ミュージアムに展示されている「世界で初めて実用化された日本語ワープロ」です。

一九六四年に英文ワープロが発表されますが、多数の漢字の中から適正な文字を選択しなければならない日本語ワープロが実用化されたのは一九七八年です。言語学の知見を用いた漢字入力法の研究成果によるもので、ここで開発された「かな漢字変換技術」と「編集技術」は、その後のパソコンや携帯電話など日本のあらゆる情報通信分野のかな漢字入力手段として引き継がれ、発展します。日頃当たり前のように使用している機器の技術開発を知ると、「文字生活」には、「技術」と「表現の欲望」が相互に嵌入、循環してきたことにも気づかされます。

（茨城大学）

茨城国語教育学会活動記録

「学部と附属学校　教員懇話会」

齋木久美・宮﨑尚子

本会は茨城大学・附属中・附属小の国語教員が国語教育について語り合う会です。令和七年度は、次のように開催しました。

日　時　令和七年七月三十一日
会　場　教育学部A棟二二四教室
参加者　〈学部〉齋木・昌子・鈴木（一）・宮﨑・李・鈴木（裕）〈附属中〉小林・中村・柿沼・古川　〈附属小〉宮内・東ヶ崎

今回のテーマは、教育実習や教育実践。

教育実習は、学校現場を通じて、学生自身が教職への適正や進路を考える重要な機会であるとともに、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力などを身に付ける場です。

実習の中日に大学でそれまでの実習の振り返り活動を行うなど、実習のスケジュールも変化してきました。

附属学校の先生方は、学生に対し、どのように考え接しているのでしょうか。

本稿では、附属学校の先生方のお話をまとめました。

【実習生である学生の印象をお聞かせください。】

○教育実習相談票等の記載から、実習に対する迷いがあることがうかがえます。ですが、子供たちへの対応を見ていると、記載されたことが、そのまま当てはまらないと思うことが多いです。実習生は、子供たちと向き合うことに一生懸命ですし、その姿勢がとてもよいと思っています。

【実習生にはどのような思いで向き合っていますか。】

○教員への志望度もまちまちで、はっきり教員にはならないと決めている実習生もいます。教員にならないからと言って、手を抜いてよいわけではないので、一緒に子供たちへの対応を考えてみよう、という姿勢で実習生には接しています。

○実習生の附属学校に対するイメージも様々だと思いますが、授業を行うことに対しては、こだわってほしいと思っています。

○教員の魅力が伝わるとよいと思っていますが、学校のよいところだけを見せたいとは思っていません。大変なことも、教員同士が協力し合って課題を解決しています。初めての実習でわからないことばかりでしょうが、教員同士がフォローし合うように、実習生とも一緒に解決していけたら、と考えています。

○教員になってほしいと思っていますので、附属での実習期間を「やってよかった」にしてほしいです。また、教育実習という現場に出たことで気づいた、社会人としてのふるまいの大切さを実感してもらいたいと願っています。

○初めから、うまくできるわけではないので、「無理しなくていいよ。」と声掛けをしています。

【附属学校でやりたい授業、研究実践、できていますか。】

○互いに授業を見合う機会も多く、強制ではなく、自身の内側から生ずるやりたいと思うことができる環境があると思います。

○思い描く教育のあり方や授業について、議論し合うことができる場にいると思っています。

○語彙教育に力を入れたいと考えています。話すことを苦手とする生徒への指導の充実のためにも、自分の考えの要点をまとめ、作文を書いたりスピーチしたりする活動に取り組ませたいと思っています。

○三者面談で、国語の勉強の方法がわからないとの相談がありました。国語の授業をしていても、国語で何を学ぶのか、が伝わっていなかったと気づきました。学習者研究にも取り組んでいます。

○「読むこと」の学習指導に関心があり、文学作品を教材とする授業実践に取り組んでいます。

児童生徒との関りを大切にし、日々の授業実践に真摯に取り組まれている附属の先生方が、実習指導でも、個々の学生に合わせた対応をされている様子もうかがえました。

毎回、あっという間に時間が経ってしまいますが、附属と学部の教員間の学び合いを充実していきたいと考えます。

（茨城大学）

第四十四回茨城国語教育学会研究発表会報告（令和八年二月八日）

文責・事務局　昌子佳広

令和七年度の研究発表会の概要について報告いたします。今回で第四十四回を数える研究発表会は、令和八年二月八日（土）に開催しました。茨城大学共通教育棟２号館にて対面開催の予定でしたが、前日夜から雪となり交通機関の乱れなどが予想されたため、急遽オンライン併用のハイブリッド方式（各参加者の意思で会場参加・オンライン参加を選択する）での開催に切り替えました。当日朝の時点では会場周辺には一〇㎝程度の積雪があり、開始時刻の午後１時頃にもまだ雪は残っていましたが、二〇名ほどの方が会場にて参加されました。オンラインを合わせて参加者は約百名でした。



今回は「文字文化とその教育について考える」というテーマを掲げ、以下のような内容・日程で行いました。

○講話①「漢字の成り立ちと書体の変遷」（李満紅／茨城大学教育学部講師）〔五〇分〕

○実践発表①〔小学校における書写指導の実践〕（堀江佳央／茨城大学大学院教育学研究科／元石川県小学校教諭）〔三〇分〕

○実践発表②〔中学校における文字文化に関する指導の実践〕（中村麻里那／茨城大学大学院教育学研究科／茨城大学教育学部附属中学校教諭）〔三〇分〕

○講話②「夏目漱石『心』装幀の石鼓文について」（宮崎尚子／茨城大学教育学部准教授）〔五〇分〕

○総括「手で書くこと、その教育の意義について考えよう」（齋木久美／茨城大学教育学部教授／本学会会長）〔三〇分〕

李満紅先生による講話①では、漢字（文字）の起源にまつわる漢籍の紹介・解説と、古く「甲骨文」に遡り、現在見られる「楷書」に至るまで文字がどのように書かれてきたのか、その書体の変遷に関して、豊富な画像資料に基づいて詳しくご説明いただきました。

次いで、茨城大学大学院に在籍されている堀江佳央さん、中村麻里那さんのお二人から、書写指導、文字文化に関する指導の実践を発表していただきました。お二人それぞれが小学校・中学校での勤務経験をお持ちであり、現場における実践と、大学院での研究活動の一環として行われた実践について報告がありました。書写の指導はともすれば技能中心の形式的な指導に陥りがちになるところ、学習環境や用具の工夫を取り入れながら、児童・生徒が字を書く生活そのものや自分を取り巻く文字環境に意識を向け、意欲的に学習に取り組んでいくための単元設定・指導の工夫等について貴重な提案・提言をいただきました。参加された現職の先生方はもちろん、学生たちにとって刺激的なご発表であったと思います。

宮崎尚子先生による講話②では、大正三年に出版された夏目漱石の『心』の装幀に用いられた「石鼓文」に関する研究成果についてお話しいただきました。漱石自身が手がけたこの装幀を通じて、漱石の書・字とその表現に関する意識の所在を解説していただきました。

以上の講話・発表を総括して、齋木久美先生から、手で文字を書くということの価値・意義について、またその教育の在り方についての提言をまとめていただきました。文字は長い歴史をもつ文化の一つです。次代を担う世代にどのような教育が求められるのか、参加者各位において検討を続けていただければと思います。

令和八年度においても、開催時期・方法を含め、研究発表会について鋭意検討を進めております。決定次第ご案内しますので、ふるってご参加いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

四年間の学修を振り返って

小林颯音

四年間の学修を通して、理論と実践は全く異なるということを学んだ。また、その学びを得たからこそ、理論をよく吸収して貪欲に実践に臨むことの大切さも強く感じることができた。三年次で実際に自分が授業をする実習に取り組む中で、これまでの大学での講義で作ってきた自分の想像が甘かったことを痛感した。模擬授業等では、講義で学んだことをもとに授業の内容や進め方が子どもにとって分かりやすいように、かつ学習者が自主的に学びに参加できるように展開の順番や話し合い活動の実施方法などを工夫していた。実際に自分が授業する実習では、これまでの講義内容や模擬授業で学んだ内容を生かして子どもにとって分かりやすい授業をと作ったが、分かりやすいこと以前に興味が持てなかったのか、聞いても発表者がいなかったりグループ活動でもただの世間話をしていたりと、授業に身が入らずに終わることが何度もあった。思い返すと、大学での模擬授業の多くは学生が子ども役となり、空気を読んで積極的になってくれたり欲しい回答をくれたりするためうまくいくことが当たり前になっていたように思う。いつの間にか、子どもがそもそもその単元に興味を示さないかもしれないという意識は薄れていたのではないかと感じている。実際には順調にいくことは少ないことや、その状況への対応のレパートリーが少なかったことを実感した。そこから、講義で得た視点や知識をもとにしながら現場の先生方の授業を参観させていただいたり、様々な授業方法を指導教員の先生と相談しながら提案して実践したりすることで、子どもが食いつきそうな授業方法が少しずつ見えてきたように思う。その学校によって子どもの実態は様々であるから一概には言えないが、学年によってどの程度のレベルの活動や発問の言葉選びが必要なのかも学ぶことができた。

大学での授業で模擬授業や授業構想をすることでイメージを膨らませても、実際にやってみなければ子どもの反応は分からない。講義の中でよく知識を吸収し、考える力をつけたうえで、それを根底に置きながら様々なことに挑戦し試行錯誤をすることが重要であるだろう。

授業力や子どもとの関り方について、自分にはいまだ課題が多く残っていると感じている。学部の時よりも実践の機会が多い大学院では、学部の時に得た自分の課題点に対する解決策を考え実践するとともに、自分の専門教科を子どもたちに楽しく学んでもらうにはどのような工夫をすればよいのか、教員になることへの具体的なイメージを持ってより発展的な考察や挑戦をしていきたい。

（大学院一年次）

国語科での四年間を振り返って

郡司清信

私は今回、このような機会をいただき、国語科を志したきっかけから大学生活を振り返りたいと思う。きっかけは、中学で読んだ小説だった。『夜は短し歩けよ乙女』という作品で言語表現、特に比喩表現の面白さに気付き、そこから言葉の面白さに熱中した。高校時代には学校生活や部活動を通して、言葉の持つ人を励ます側面と人を傷つけうる側面を実感し、国語科の教員を志すようになった。こうして茨城大学に入学し、国語や教育について学びを深める日々が始まった。1年次で読書会というサークルに所属し、作品中の解釈が分かれる表現について他の学生と議論を重ねた。全く同じ文章を扱っているのに人によって読みが異なることや、解釈に関する友人との議論は刺激的で、今でもよく覚えている。大学3年になると、国語学ゼミに所属した。私は日本語が母語であり、普段から特に意識もせずに日本語を使っている。国語学を学んでいくなかで、今まで漠然と使っていた日本語を理論的に把握することができた。それはまるで、ぼんやりとした理解に輪郭が与えられていくよ

うで、新鮮な体験であった。

また、学部時代に衝撃を受けた体験として学部３年次の教育実習を思い出す。付属小学校で実習を行い、授業を参観する機会に恵まれた。児童が自らの言葉で問いを設定し、課題に取り組む姿は主体的な学びを体現しており、講義を超えた生きた学びを得ることができた。児童生徒が自ら学びたいという気持ちを持って意欲的に学習に取り組む、私の理想の授業像が明確になった経験だった。４年次には公立中学校で実習をさせていただいた。生徒が主体的に学びに向かうことのできる授業を目指したが、そう上手くはいかなかった。付属小学校とは異なる状況であったとはいえ、自分の技量不足を実感した出来事だった。学部時代の２回の実習で自分の理想と現在地を知ったことは、今後の見通しを立てるうえでも大きな意味を持つ経験になった。

私は言葉の面白さを伝え、児童生徒が主体的に学びに向かえる授業を作ることのできる教員を目指し、教職大学院に進学することを決めた。自分の理想の教師像を目指し、教職大学院での２年間を精一杯歩んでいきたい。

（大学院一年次）

